



稲沢市民病院のナースカーの活動

城西大学経営学部教授 伊関友伸

2度目の稲沢市民病院への訪問

2025年8月4日、総務省の地方公共団体の経営・財務マネジメント強化事業で、アドバイザーとして愛知県にある稲沢市民病院を訪問した。1月23日の訪問に引き続く2回目の訪問であった（1回目の訪問の状況は市政2025年4月号で紹介している）。

今回の稲沢市民病院への訪問で最も印象に残ったのが、看護局の「ナースカー」の試みである。前回の訪問で看護局の皆さんと話した時、訪問看護ステーションの活動が活発で、加えて2024年には15の介護施設と協定を締結し、カンファレンスや救急の受け入れなどを行っていることを聞きした。意見を交換する中で、介護施設などの訪問を一步進化させて「ナースカー」の活動を行ってはどうかと提案した。ナースカー自体は筆者のオリジナルではなく、ある民間病院が行っていた活動を紹介したものであった。その民間病院で

は、病院と介護施設などの間でホットラインをつくり、入所者の体調が悪化したときに電話をしてもらい、必要であれば看護師などの職員が出向くというものであった。

一般に介護施設などにおいては、特別養護老人ホームには医師は常駐せず、各施設内の看護師は1人か不在であることが通常となっている。このため、入所者が体調を崩したり、崩しかけている時に、医療職でない施設職員が医療機関に相談するにはハードルが高い状況がある。症状の判断ができない状況で救急車を使うことも気が引けることから、結局躊躇（ちゅうちよ）して受診が遅れ、救急搬送された時には重症化してしまう場合も少なくない。

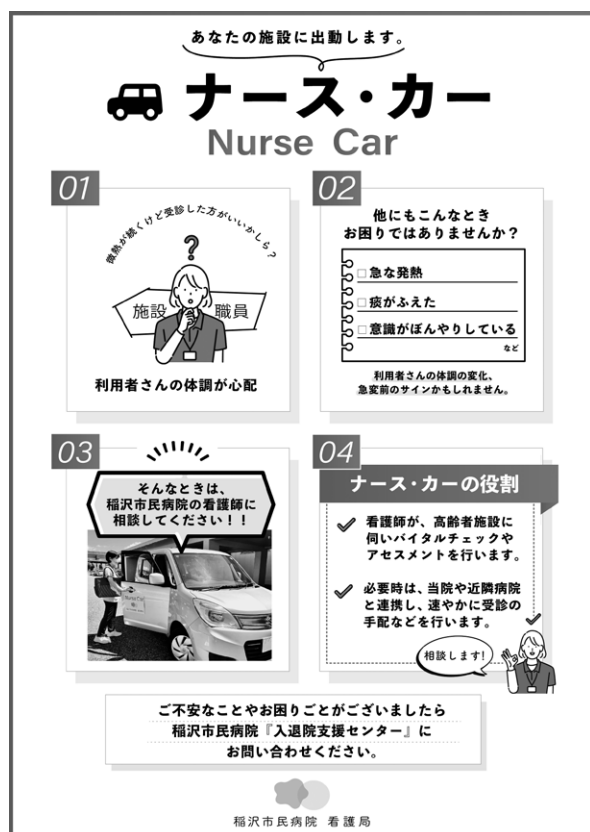
ナースカーの活動により、介護施設などの入所者に対して早期にアセスメントを行い、軽症での受診、重症化の予防を目指すものである。すでに介護施設などの連携のできている稲沢市民病院看護局であれば、介護施設などへの効果的な関わりができると考えて提案をした。

稲沢市民病院のナースカーの活動

提案を踏まえて稲沢市民病院は、ナースカーの試みについて看護局長や入院支援センター看護師長がチラシを持って協定病院やそれまで協定を結んでいなかった有料老人ホームやグループホームを回って周知に努め、2025年4月からナースカーの活動を開始した。

図は施設向けのナースカーのチラシである。まず、介護施設職員が「微熱が続くけど受診した方がいいかしら?」「利用者さんの体調が心配」というイラストで施設関係者の目を引く。その上で「他にもこんな時にお困りではありませんか?」として、「急な発熱、痰がふえた、意識がぼんやり」などの症状をあげ、「利用者さんの体調の変化、急変前のサインかもしれません」と注意を喚起。「そんなときは、稲沢市民病院の看護師に相談してください!!」とナースカーに乗り込む看護師の

図 ナースカーのチラシ



写真を示して、利用を促している。

その上で、ナースカーの役割として、看護師が、高齢者施設に伺いバイタルチェックやアセスメントを行い、必要な時は福沢市民病院や近隣の病院と連携し、速やかに受診の手配を行うことを説明している。

実際の運用では、施設からの相談電話についてベテランの看護師が話を聞き、受診が必要と判断できる場合は、その場で救急車の搬送依頼を行う。現場でのアセスメントが必要と判断した場合は、看護師がナースカーで高齢者施設に向き、施設職員とアセスメントを実施後、救急搬送の場合は救急車に同乗し、病院の救急外来を受診することになる。

2025年4月から8月までの5カ月で、

63件の相談があった。救急搬送48件、施設の搬送車で救急外来受診12件となっている。相談のきっかけは、発熱、呼吸状態悪化、骨折・骨折疑い、意識レベル低下、腹痛・嘔吐・下血、食欲低下の順に多く、疾患別では、肺炎、骨折、尿路感染、COVID-19などとなっている。相談を受けた事例のうち入院が必要な症例は54件に達している。

ナースカーの活動による入院患者の死亡率は1・9%と通常の高齢者施設からの入院患者の平均死亡率13・9%より低く、平均在院日数は20・1日と平均の21・8日より短くなっている。早期の受診を促すことで、高齢者の重症化の予防につながっていると考えられる。9月19日には協定施設が集まる「ナース

カーの集い」が開催され、お茶とお菓子を食べながら事例紹介や意見交換がなされる予定である。なお、「ナースカー」は特別な車ではなく、病院の公用車に「ナースカー」のマグネットを貼って活動されている。

ナースカーの活動は周辺の病院への刺激となり、すぐに2病院がナースカーをまねて活動を始めたと聞いている。施設や高齢者の利益になるので模倣は歓迎すべきことであろう。福沢市民病院のナースカーの活動の今後を期待をしたい。

タイトルの「アスクレピオスの杖」とは、ギリシア神話に登場する名医アスクレピオスの持っていた蛇くさしヘビの巻きついた杖。医療・医師の象徴として世界的に広く用いられているシンボルマークである。

筆者プロフィール

伊関友伸 (いせき ともし)

1987年埼玉県入庁、県民総務課、大利根町企画財政課長、県立病院課、社会福祉課、精神保健総合センターなどを経て、2004年城西大学経営学部准教授、2011年4月同教授。研究分野は行政学。総務省「持続可能な地域医療提供体制を確保するための公立病院経営強化に関する検討会」構成員など、数多くの国・地方自治体の委員を務める。総務省経営・財務マネジメント強化事業アドバイザー。著書に『新型コロナから再生する自治体病院』（ぎょうせい2021年）など。